[DIGITAL MARKUP//AI INTERVENTION]

AI共著論文誌創刊構想の実態と含意

日本生物物理学会「BPPB for AI」プロジェクトの制度的摩擦と未来図

{FUTURE_TRAJECTORY//ANALYSIS}

独立行政法人日本学術振興会（JSPS）研究成果公開促進費 採択事業 分析ブリーフィング

センセーショナルな報道と、学会主導の5年計画のギャップ

報道のイメージ

「AIが共著者の論文専門誌創刊へ」— 突発的な広報案件や奇策としての誤認。

実態

主体：日本生物物理学会（学会公式事業）

資金：2026年度 JSPS科研費「研究成果公開促進費」採択

計画：5年事業。「Biophysics and Physicobiology for AI」誌の創刊を目指す中期計画。

この計画の核心は「話題づくり」ではなく、AIが研究計画・執筆・査読に関与する時代の「学会出版制度の先回り設計」にある。

現在地：構想段階と実装段階の境界線

確定事項 / 現在稼働中

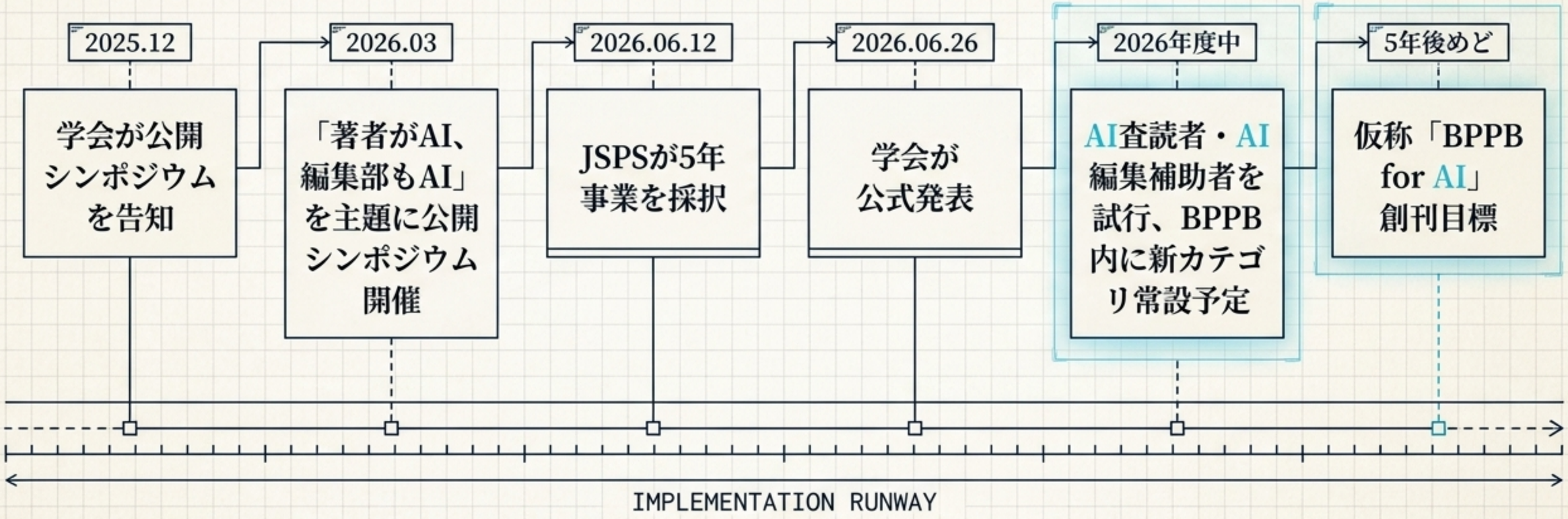
- 事業名：「Biophysics and Physicobiology for AI 誌の創刊を目指して」　（2026年6月公表）
- 母体：一般社団法人日本生物物理学会 / BPPB誌
- 現行規程：AIの実質的利用は謝辞・方法での開示対象。AIを著者とは明記せず。外部生成AIへの原稿投入は禁止。

将来構想 / 5年後の目標

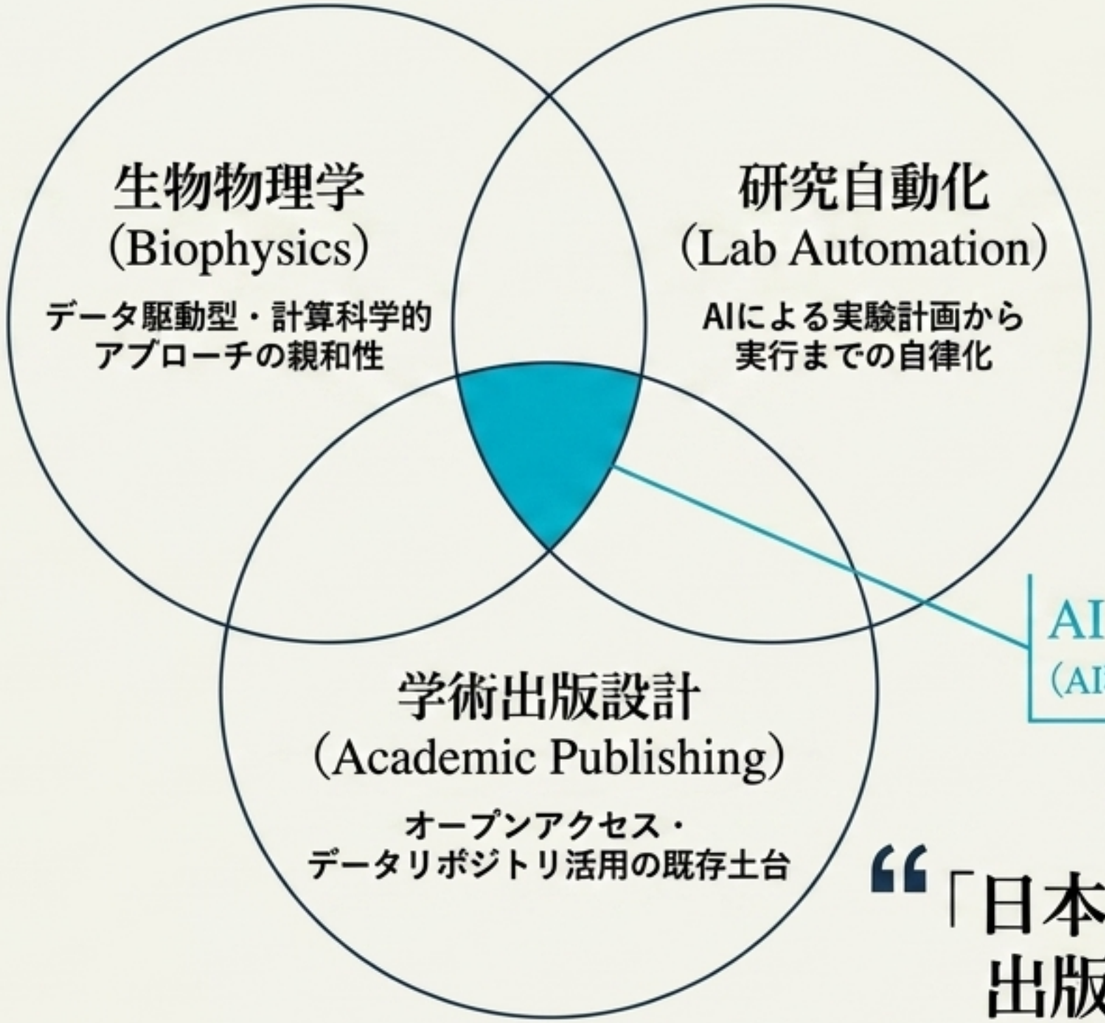
- 創刊誌の正式名称（現在「BPPB for AI」は仮称）
- 新誌専用ウェブサイト・投稿規程・編集集委員会名簿（未記載）
- “Research with AI Scientists” 常設カテゴリの実装
- 内部AI査読者（AI Reviewer）とAI編集補助者の導入

現時点で公表済みなのは「新誌の確定仕様」ではなく「創刊準備の事業」である。

突発的ではない、段階的な制度設計の軌跡



なぜ日本生物物理学会なのか？
交差領域としての必然性



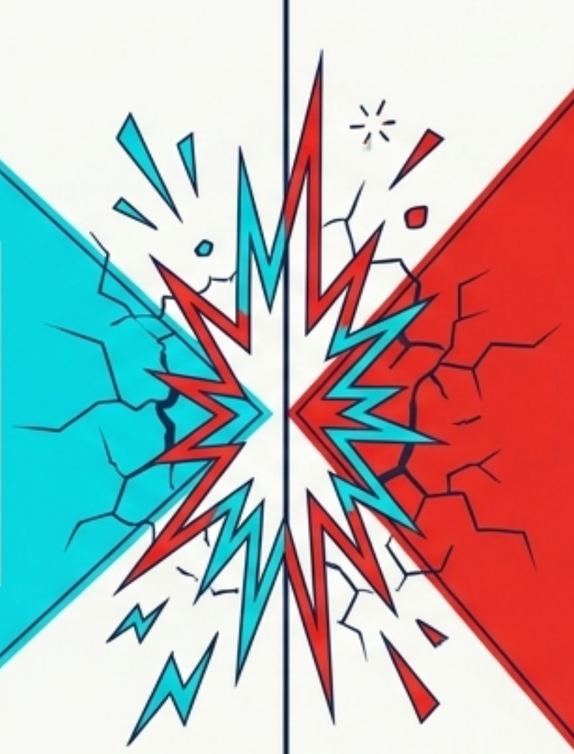
AI for Scienceの出口設計
（AI科学者との共著と検証可能性の担保）

“「日本から国際的に新しい
出版モデルを提示する」”

最大の制度的摩擦：著者資格（Authorship）の再定義

BPPB for AI 構想

AIを「科学者」として認知し、
共著者として迎え入れる未来図。



ICMJE ガイドラインの壁

著者資格の4要件：構想への寄与、論文の起草、最終版の承認、研究全体への説明責任。

「AIは最終承認と説明責任を持てないため、著者資格を満たさない」

BPPB for AIは、主流ルールへの「単純適合」ではなく、それを乗り越える「別制度の提示」を迫られている。

国際標準マトリクス：世界の出版界とのコントラスト

出版物/ガイドライン	AIの著者扱い（AI as Author）	投稿規程の要点（Disclosure）	査読方式（Peer Review）
BPPB for AI構想	受理方向（常設予定）	新誌規程は未定	内部AI Reviewer試行予定
Nature Portfolio	不可	Methods等で開示必須	査読者の外部AI投入禁止
Science Journals	不可	不適切なAI利用は審査停止	査読者のLLM投入不可
Elsevier journals	不可	人間責任を前提に別建て宣言	各誌規程によるが人間責任
ICMJE / WAME	不可	AIを主要ソースとして参照不可	編集者・査読者のAI使用も透明化

2023年以降、国際出版界は一斉に「AI著者禁止・利用開示・査読機密強化」へ舵を切った。本構想はこの潮流の完全に“外側”にある。

著作権の二重構造リスク：法的帰属の空白

Tier 1: 侵害リスク（AI生成物が第三者の権利を侵害しないか）

- BPPB現行規程: AI生成図版を厳格に禁止。
- 日本・文化庁の見解: 非拘束的整理。侵害判断は個別事案に依存する。

Tier 2: 著作者性リスク（AI自体が著作権の主体となれるか）

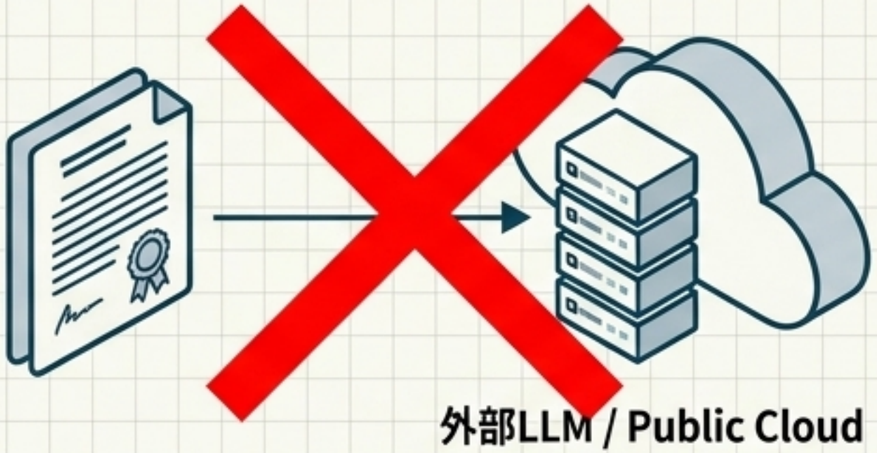
- 米国著作権局のスタンス: 「人間の表現的寄与が十分な場合にのみ保護」。純粋AI生成物の登録には人間著作者性が必要。

課題: AIを著者としたとき、著作権帰属やライセンス同意（法的署名）の主体が誰になるのか？

Bottom Line: "AIが書いたから" は免責にならない。
責任の所在は常に人間に固定されるのが国際法務の現状。

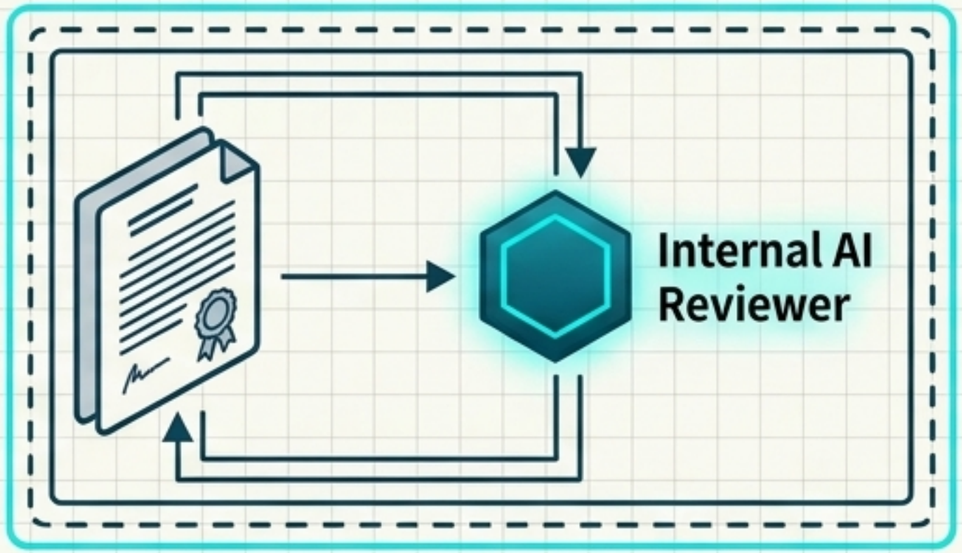
実務的影響：査読セキュリティと「閉域環境」の必須化

外部SaaSへの原稿アップロード



Nature、Science、そして現行BPPBも、査読機密保持のため
外部LLMへの未発表原稿の投入を厳禁している。

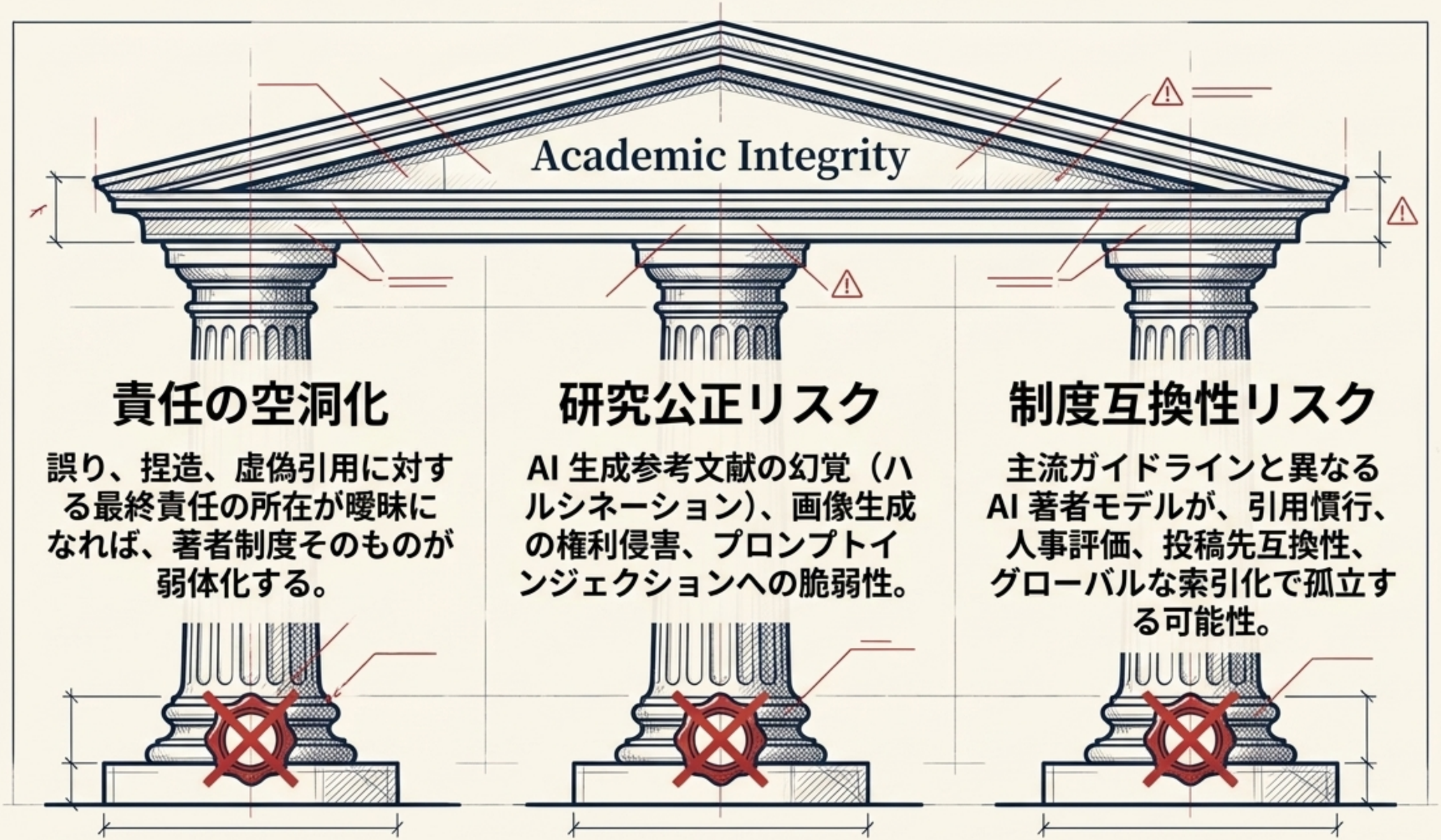
BPPBが目指す内部環境



単なる完全自動査読ではなく、担当編集者+人間査読者を補助する
「内部AI Reviewerの開発」。
外部にデータが漏れない secure / non-public な査読基盤の構築。

今後の争点は「AI利用の可否」ではなく、「どのAIを、どのセキュリティ境界内で、誰の責任のもと使うか」へ移行する。

制度実装に向けた「3つの潜在リスク」



責任の空洞化

誤り、捏造、虚偽引用に対する最終責任の所在が曖昧になれば、著者制度そのものが弱体化する。

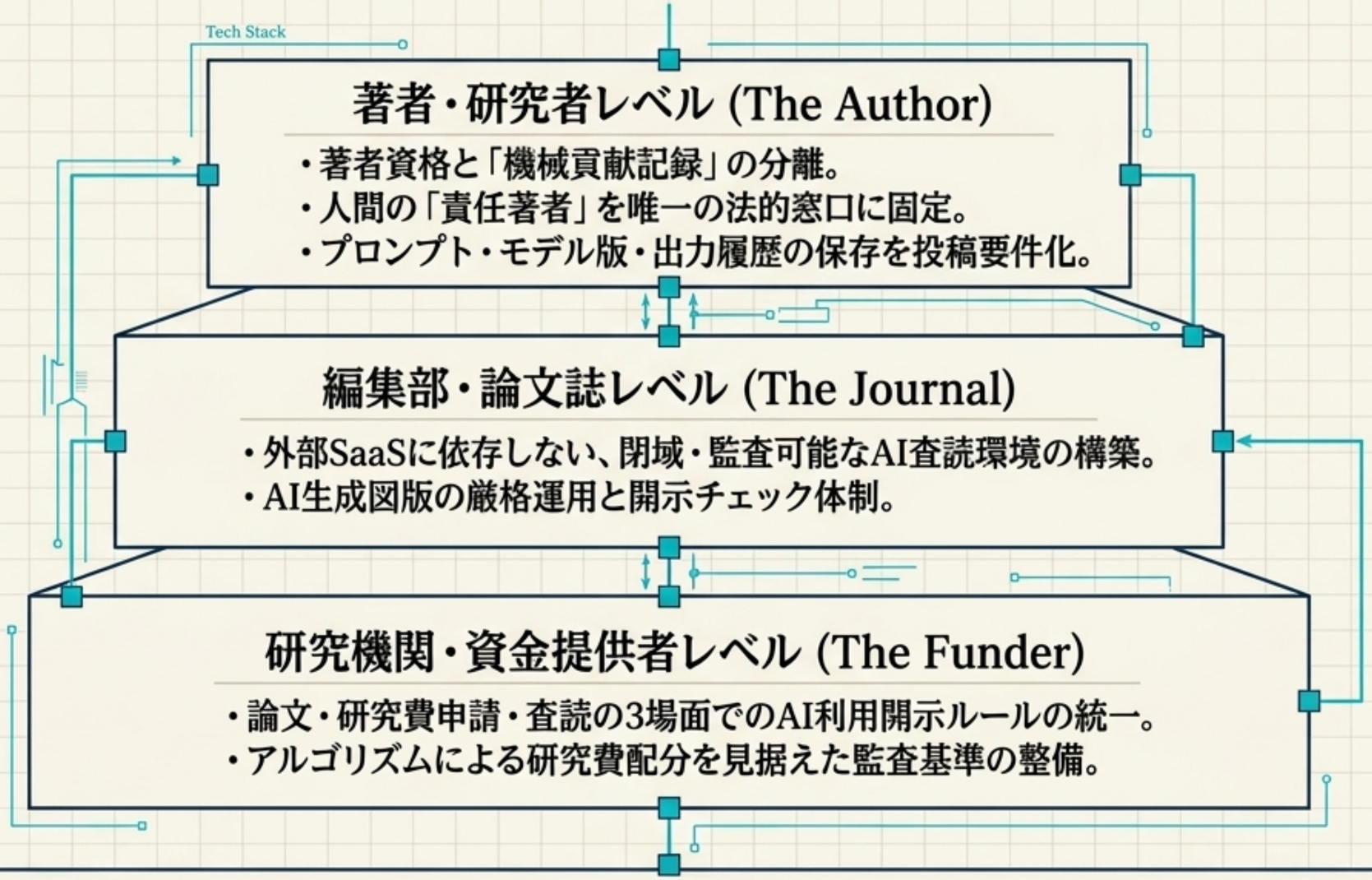
研究公正リスク

AI 生成参考文献の幻覚（ハルシネーション）、画像生成の権利侵害、プロンプトインジェクションへの脆弱性。

制度互換性リスク

主流ガイドラインと異なる AI 著者モデルが、引用慣行、人事評価、投稿先互換性、グローバルな索引化で孤立する可能性。

AI共著時代に向けた「フルスタック」の制度再設計



BPPB for AI 構想は、出版界にとどまらず、研究評価システム全体を変革する試金石となる。